

# 1930年代における階級的教育労働者の 運動についての調査

——日向新興教育研究会と全協・日本一般使用人組合教育労働部  
南九州支部について——

岡 本 洋 三

## A Survey on the Education Workers' Movement in the 1930s

Hiromi OKAMOTO

### はじめに

戦前日本の天皇制教学にたいして真正面から闘った教育労働者の運動，新興教育研究所のちに新興教育同盟準備会（略称「新教」）と日本教育労働者組合のちに全協・日本一般使用人組合教育労働部（略称「教労」）の運動については，今日かなり明らかになってきた。それはこの運動こそが日本の教育労働運動の源流であり，教育労働運動が実践上の困難な問題にぶつかるとき，この運動の経験・遺産にたち戻ってその教訓に学ぶことによってその困難を打開する道を明らかにすることができるかと期待されるからである。「新教・教労」の研究史は，戦後の日本の教育闘争の実践の展開と不離不即の関係にあったとも云えるのである<sup>1)</sup>。

今日，教育をめぐる危機はかつてなく深刻なものとなっている。その打開のために人民の闘争力の飛躍的な発展が求められている。最近の教員組合の運動論や教師論をめぐる活潑な論争は，この教育危機の根深さとそれにたちむかうべき運動側の力量との矛盾をいかに解決するかという問題を根底にもっている。戦後における教育運動の輝やかしい発展は，必ずしも戦前の遺産・経験の十分な摂取・継承のうえにきずかれたとはいえない面をもっていた。それは教育運動を支える社会的諸力，とりわけ労働運動に示された人民の民主主義的力量に大きく依拠していた面が強く，その意味では教育運動の固有の問題を十分に掘りさげるとまがないまま展開された面があった。近年，教育運動史にたいする着目がひろがってきたのは，今日の時点において教育運動の原則についての自覚的な追求が実践から要請されてきたことと深く関係しているのである。

従来の「新教・教労」の研究は，大きく二つの弱点をもっていたように思われる。一つは運動の観方・評価をめぐる方法論上の問題である<sup>2)</sup>。もう一つはそれと相互に関連しあっていること

\* 1975年11月21日 受理

1) この点については拙著「教育労働運動史論」（新樹出版 昭和48年）第二部第五章で論じた。

2) この問題についての筆者の見解は，前出の拙著第二部第二章から第四章において一応展開した。

であるが資料的な制約である。この運動が、1930年代に日本が戦争とファシズムの道をつき進んでいった時期に、この人民の死活の問題に文字通り真正面から非妥協的に戦闘的にとりくんだこと、教育の問題を政治・経済との関係において正しく位置づけ、教育闘争を政治・経済闘争との不可分な結合において闘ったこと、まさに運動のこの特質のゆえに、天皇制権力の苛烈な徹底的な弾圧にさらされたという事が、この運動の実体を十分に明らかにするうえできわめて大きな困難をもたらした。この運動は権力の暴圧から組織を守るために、その実体を明らかにするような資料を残すことができなかつたし、また実践を明らかにしうる資料的価値のあるものはすべて根こそぎに弾圧者によって押収されたからである。このような事情のためにこの運動の研究はこれまで主として権力側の弾圧時の取調べ資料によってなされることが多く、そのことがさきの弱点とも関連しているのである。

官憲側資料は、その資料成立の特殊な事情から次のような問題を含むことが予想される。第一は、弾圧という目的からする資料の取捨があること、従って運動を発展させるという観点から着目したい部分が欠落しているかも知れないこと。第二は、弾圧目的のために資料が解釈されていること、そして屢々その解釈されたものが客観的事実であるかのように資料として残されていること。第三に、運動の側の抵抗によって重大な事実が秘匿されている場合があること。第四に、直接の弾圧者、取調べ者が特高で、文部省関係の資料はそれに基づいて第二次的に作製されている場合が多いこと。そのために二重・三重のゆがみや誤りを生みだしやすいこと、などである。

もちろん、これまでの研究においても運動側の資料が皆無ではない。しかし文書資料は「新興教育」が主で、他は運動の当事者の証言であった。当事者の証言はきわめて貴重であるが、そこにも資料的価値に問題がないわけではない。第一に、当時の運動の非公然的性質から当事者であってもその体験・見聞はきわめて限られた範囲にとどまること。第二に、多くが記憶にもとづくものであるため、忘却や記憶ちがいが避けられないこと。第三に、証言者の現在の思想的立場や価値判断によって事実の取捨選択、意味づけがなされる場合があること。第四に、聴取者側の質問によって証言が制約されがちであること、などである。

このような事情もあって、これまでの研究では運動の全体的な骨格はかなり明らかになってきてはいるものの、運動のひろがり、組織の大きさという基本的なことさえも明確に確定し得ていない状況にあり、各地の闘争実践についてはまだまだ未調査のところが多い。従ってこの運動の思想・理論・実践の検討を具体的な地域的特質をふまえつつ当時の教育労働者の要求・意識の現実に即して行なうには不明な部分が多く残されている。まして現在の実践的課題にこたえるには「新教・教労」の運動の生き生きとした実践の具体的・全体的な姿を浮びあがらせることがとりわけ必要になってきている。

本報告は、以上のような課題意識から、文部省資料などでかなり重視されていながらこれまで未調査であった宮崎県地方の運動についての調査結果をできるだけ詳しく報告しておきたいと考えた。蒐集した資料もできるだけ生の形で提示することが今後の研究にも役立つと考え、紙幅のゆる

すかぎり採録した。しかしもっとも興味ある「教育実践」については量的に到底採録できないので表題あるいは項目のみにとどめざるを得なかった。また今回の調査にもとづく検討も紙幅の関係から多くの場合事実確定の論証手続を省略して結論のみを示すことになったこともおことわりしておきたい。なお資料の紹介は、最初に資料番号、次に資料作製者、資料名、発行年月、ページを記し、改行して表題名または見出し、本文の順に記した。資料の検討にあたっては資料番号で典拠を示すことにした。

## I 日向新興教育研究会と教労南九州支部の運動についての資料

### A 官憲側資料

A-1 内務省警保局 特高月報 昭和7年4月分 97ページ

「三・二一 宮崎県に於て新興教育及プロ科学に関係せる者二十名を検挙す」

A-2 文部省学生部 思想調査資料 第15輯 昭和7年7月 93-94ページ

「五、宮崎県に於ける『新興教育』支局設置

宮崎県大王小学校訓導山元都星雄、祝吉小学校訓導小山光、梅北小学校訓導横山巖等は予てからプロレタリア文芸に関する書籍を購読していた。偶々彼等の友人日本共産青年同盟員津曲武治（元中央大学生）が昭和6年7月上旬彼等に「新興教育」の研究会結成を勧め、行く行くは之を解消して同盟の地方細胞に発展せしめんとした。

然るに前記三訓導は之に共鳴し、同年7月13日津曲と密に会合し、研究会を「日南新興教育研究会」と称すること、機関紙を発行すること等を協議し、各自会員の獲得、其の他組織の拡大強化に努むることになった。茲に於て山元は安久小学校訓導阿万超二、及び種子田福盛の二名を獲得し、昭和7年3月20日迄毎月一回又は二回宛研究会を開催し、更に「赤いチョーク」と題する謄写版印刷物を機関紙として発行、メンバーに配布していた。

而して山元は自ら中央責任者となり、その下にA B C Dの四班を設け、班は中央研究会以外に各々班研究会を開くこととし、「新興教育」以外に「プロレタリア科学」「無青」「産業労働時報」「文学新聞」「ソヴェートの友」「大衆の友」等の左翼新聞、雑誌、単行本等を回読することにした。かくして研究会の活動は進展し、其の後メンバーとして訓導五名、元代用教員一名、高女教諭一名を獲得した。

茲に於いて同研究会に「新興教育」支局設置の議起り、その旨「新興教育研究所」に通知した所、昭和7年1月中旬「Hほ」支局として認定した旨の通報があった。

一方彼等は昭和6年10月末より「プロレタリア科学研究所」とも連絡し、支局番号「九州第八号」の指定を受け、「プロレタリア科学」を研究会テキストとして「新興教育」と併用して居た。併し彼等は教職にある関係上読者獲得意の如くならない為焦慮しつつあった所、偶々12月上旬前

記津曲再び帰郷し、文化サークル設置によるフラクション運動の効果的なることを説示し、其の方法等を指導した。その結果、山元、小山等は都城高等女学校、都城中学校、北諸県郡及び都城市各学校職員等四十名を集め、非合法的意図をカムフラージュして表面合法的に「都城文芸研究会」を結成した。

又彼等は児童に対するプロレット・カルトを重要なりとし、山元は昭和6年11月頃「殿様と三太郎」と題し、資本主義社会機構の暴露並に極端なる反戦思想を記載した自己創作の童話六百部を印刷し、自校児童及び同志の勤務校の児童に配布した。その他機関紙「赤いチョーク」は殆んど毎号に亘り、「教材研究」の標題の下に国定教科書中の各科を階級的に批判し、ブルジョア教育の暴露排撃に努め、国定教科書を通じて児童に逆の階級的效果を与えることの必要を強調した。

その他津曲は之等支局員を共産青年同盟の影響下に引込むべく昭和6年9月より「無青」「無新」「レーニン青年」「農民闘争」等を彼等に配布回読せしめていた。

然るに偶々是等の事実が「プロレタリア科学」直接読者の調査より判明するに至り、昭和7年3月21日関係教員十一名の検挙を見た。取調の結果昭和7年5月26日山元、横山、小山、阿万他一名は起訴猶予となり、他の者は釈放せられた。尚山元は新聞紙法違反として罰金六十円を課せられた。

学務当局に於いては昭和7年4月28日附を以て山元を懲戒免職に、横山、小山、阿万、種子田、他三名を諭旨退職に処した。

### A-3 文部省学生部 プロレタリア教育運動 下 昭和8年4月

「第一章 教員に対する宣伝煽動 第一節 教員獲得の戦術 一、学校内に於ける同志の獲得」の項 「…新興教育研究所は『学校調査票』を作って鳥取県下、宮崎県下の支局を中心に附近の学校を調査した事実がある。斯くして周到な調査の後に目星をつけた教員の獲得が行わるるのである。」(3-4ページ)

「第一章 第一節 二、読書会・研究会等の作り方と其の運用方法」の項 「最近に於いては所謂『サークル』なる新方針に基き『文芸研究会』を作り表面は文芸の研究をなすと称し、裏面に於いて主義の宣伝をなしていた実例が宮崎県に於ける新興教育支局設置事件に於いて発覚したが、この会には約四十名の会員があり多数の教員が加わっていたのである。」(10-11ページ)

「第二章 児童に対する宣伝煽動 第二節 教材の左翼的取扱ひ」の項 「神奈川県、京都府、宮崎県、長野県等に於いて、此の種の事例を発見する」(45ページ)「次に国法読本に就いて、左翼的解釈を施したものの数例を挙げる。…『巻二』六、犬ノヨクバリ(略)七、ユフヤケ、八、月九、クリヒロイ 十、木ノハ(略)『巻一』十一、ミヨチヤン(略)十二、ネヅミノチエ(略)『巻四』八、山びこ(略)九、フクロウ(略)十、日と風(略)『巻四』五、白うさぎ(略)七、私どもの町(略)『巻六』第一、俵の山の実際的取扱(略)第三 ヤクワントテツピン(略)第四 きのこと取り(略)第六 くりから谷(略)第七 霜(略)」(51-62ページ)

「第二章 第五節 童話・演劇・絵画・音楽による宣伝 一、童話」の項 「左傾的意識を盛った童話を創作し、之を児童に読ませた事件が宮崎県下にあった。この童話は一見親孝行を描写し

たものの如くであった。然もその奥に巧みに反戦的、階級的意識をひそませたるものであるがために、その作の作者である左傾教員の奉職せる小学校では当初は全く右の事情を察知することが出来なかった。それがために校長自らこの童話の活版印刷を斡旋し、全校六百の児童に配布することをすら許可したものであった。然るに後に至り警察当局の知るところとなり、該童話に盛られた左翼的意識の程度より作者の思想をうかがい、はしなくも四十余名の関係せる教員左傾事件の発覚する端緒となったのである。

参考のために右童話の梗概を揚ぐれば次の如きものである。 童話『殿様と三太郎』梗概(略)(89-91ページ)

#### A-4 文部省学生部 プロレタリア教育の教材 昭和9年3月

「第一篇 プロレタリア教育の教授方針 第三章 国語科教授方針 第一節 読み方教授方針 第二 教案及教材観」の項に「三、犬ノヨクバリ(巻二、第六) 四、木ノハ(巻二、第十) 五、ミヨチヤン(巻二、第十一) 六、ネヅミノチエ(巻二、第十二) 七、白うさぎ(巻四、第五) 八、私どもの町(巻四、第七) 九、山びこ(巻四、第八) 十、フクロフ(巻四、第九) 十一、日と風(巻四、第十一) 十二、俵の山(巻六、第一) 十三、ヤクワントテツピン(巻六、第三) 十四、きのこ取り(巻六、第四) 十五、くりから谷(巻六、第六) 十六、霜(巻六、第七) 十七、胃とからだ(巻八、第二十五)(以上いずれも教材批判の文は省略した)」(85-101ページ)これは「宮崎県新興教育支局機関紙『赤いチョーク』より採録したものと注記されている。

「第三篇 プロレタリア教育の教材 第一章 概説」に於いて「其の他に地方的なものとしては日本一般使用人組合教育労働部及び新興教育同盟準備会等の地方支部或は支部準備会発行の機関紙、ニュース(例へば新興教育宮崎支局機関紙(『赤いチョーク』)等にも亦屢々プロレタリア教育の教材が掲載されている。」(401ページ)と記され「第三篇 第三章 国語科教材 第一節 読み方教材 第二 教材」に「(一) 童謡 一、五一ぢいさん(略)」(436ページ)が宮崎県『赤いチョーク』より採録されている。

「第四篇 プロレタリア教育の実際教授及其の児童に対する影響 第一章 プロレタリア教育の実際教授 第三節 園語科実際教授 第三 話し方実際教授」の項に「七 宮崎県の例 宮崎県都市大王尋常小学校訓導山元都星雄(新興教育研究所 宮崎支局関係者 昭和7年4月28日懲戒免職)は昭和六年十一月頃別記の如き『殿様と三太郎』と題し、資本主義社会機構の曝露並に極端なる反戦思想を記載した自己創作の童話六百部を印刷し、自校児童及び同志の勤務校の児童に配布した。(以下略)」(657-658ページ)

#### A-5 文部省思想局 思想調査資料 第24輯 昭和9年8月 47ページ

宮崎の運動については「関係男教員十名、女教員二名」と記している。

以上の資料のうち、A-3の第二章第二節は宮崎の運動の資料であることを明記していないが、A-4の資料と同一であるので記した。発行時期から言えばA-3の方が1年程早い、A-3の方がA

-4より原資料に近いとは限らない。上述の「赤いチョーク」からの資料採録にしても、A-3とA-4では若干の句読点のうち方のちがいや語句のちがいがあがるが、どちらが原資料の正確な再現であるかわからない。

運動の展開内容についてはA-2の資料がもっとも詳しいが、運動のみかたは勿論、その事実の記述にもかなり疑問がある。その検討はⅡで行なう。

## B 新聞記事

**B-1** 三州日日新聞（以下「三州」と略記）昭和7年2月11日（以下7・2・11と記す）

「文芸同好者が研究会を設く 十四日産声をあぐ （前略）今回大衆文芸学の初歩より各階級に亘る研究会が発会されんとす 発企者は常に斯界に興味と研究を有する都中平井保彦氏都高女校宮崎百太郎氏都城南尋高校肥田木淳氏の三氏にして本会を都城文芸研究会と銘打って来る十四日（日曜）午後一時より都城市早鈴町医師会堂において発会式を挙行されるる予定であるが当日は斯界の権威七高教授新屋敷幸繁氏其他有志の講演ある由にてなるべく一般の聴講来会を歓迎すと」

**B-2** 宮崎新聞（以下「宮」と略記）（7・3・18）

「時も三・一五記念日に極左不穏文発見 空家の板塀に二間余も書連ぬ 警察大活動を開始す（本文略）」

不穏分子の行動を調査 未だ手がかりがないらしく当局神経をとがらす（本文略）

美事な筆跡 附近の者はかたる（本文略）

不穏文事件の容疑者逮捕 裏面に全協系との連絡か 宮崎署極秘裡に活動（前略）十七日朝に至り市内某方面から数名の学生風の男を引致し来り（中略）事件は相当拡大するのではないかと見られ（後略）」

**B-3** 「宮」（7・3・23）

「不穏楽書事件で都城で三名引致 某教員も家宅捜査取調受く 特高課長ら乗込む（前略）突如二十日夜神崎特高課長、重山、重永両警部補、井戸川、立岡、竹下、興相四巡査部長は都城署に乗り込みかねて注意中の人物三名を召喚取調べに着手し二十一日午後某小学校教員宅を襲ひプロレタリア科学その他左翼文学思想に関する多数の書籍雑誌を押収し取調べたが某教員は取調べ終了と共に帰宅をゆるされた。が前記三名は引続き留置し（後略）」

「赤色分子の大半は現職の小学校教員 都城方面の教育界に一大衝動 別項の如く赤色分子の犯人被疑者として県特高課及び宮崎、都城両署特高課員総動員の下に二十一日早朝突然身柄を拘束した連中についてはその筋では極秘に附して居るが今の処総計八名でその殆んど全部が小学校教員と見られ内都城市内二名、郡部六名内中郷村から二名の教員が引致されて居る模様（後略）」

**B-4** 「宮」（7・2・24）

「小学校教員を中心の左傾事件に手入れ 都城署に七名を検挙（前略）二十一日早朝市内始め

市附近数ヶ所に向って大活動を開始、インテリ青年らしい七名を検挙すると共に柳行李に一杯『戦旗』その他の不穏文書を証拠品として押収（後略）

「『戦旗』支部を設けて不穏計画か 中央とも連絡あらう （前略）右教員等が中心となり発禁雑誌たる『戦旗』の支部を設け地方インテリ青年を引込んで潜行的に治安維持法違反の不穏計画を目論みつつあったのを探知されたものらしく、然も一味の某は三・一五事件にも関係した鹿児島の人と繁々往復していた事実もあり中央方面との連絡もあると見られてゐる。」

「高千穂にも飛火か 重山警部補が急行 なほ右左傾事件は同地方のみならず県下各地に関係者もあり女性も加わっている模様で（後略）」

「中心人物は秀才 結婚問題から自棄気味 同事件の中心人物と目されてゐる市外某小学校教員横溝保（二八）＝假名＝は中学時代から頭脳がよく文才に通じ相当の豪家に生れた（後略）」

「取調終了後懲戒免職か （本文略）」

#### B-5 「三州」（7・3・24）

「左傾思想の教員は辞表を出したか 都城始まっての不祥事だ 小学教員の左傾運動 志戸木議員（前略）校長は既に進退伺ひを出したか 大山市長（前略）校長の自決 未だ何等さういふことがない 事件は調査中であるから其結果によって善処する。」

（都城市議会での質疑の記事である）

#### B-6 宮崎時事新聞（7・3・24）

「赤色分子の一斉掃蕩 都城小学教員の思想事件に鑑み 異動直前で教育界が驚く （前略）思想容疑事件関係人並びに参考人として十余名の青年を都城署に引致するとともに戦旗其他の証拠物件を柳行李一杯に押収（中略）右は同市を中心に奉職中の小学校教員市内一校北諸県郡西部一校南部一校の二校、三名づつの青年教員が昨年頃から某中央方面と連絡をとり左傾雑誌の読書班を細胞的に結成しやうとしたことが未前に発覚したものとみられ、現在実行の段階に入ったものは首謀者二、三名に過ぎぬ模様である。（中略）結局首謀者は諭旨退職に至るものとみられ月末の定期教員大異動を目前にして県下教育界の人心を可成り脅怖に導いてゐる。（後略）」

#### B-7 「宮崎時事新聞」（7・3・25）

「事件拡大を恐れ 各校職員間の大恐慌 更に数名を招致して嚴重な取調 都城方面の思想事件（前略）事件は益々拡大し更に二十四日郡部から数名を招喚して嚴重取調べ（後略）」

#### B-8 「宮」（7・3・25）

「都城市を中心とした赤化事件の検挙 憲兵分隊と県特高課が連絡し 県下に跨る広汎な事件（本文略）

「中心人物は鹿児島に潜む 北諸を六班に細胞組織とし某共産党員が操る 事件の背後には某共産党員が潜みその指揮によって小学校教員の赤化を目的とするプロレタリア文化聯盟、新興教育都城支局を設置すべく都城市及北諸県郡内をA B C D E Fの六班に分けて細胞組織により潜行運動を昨年春以来続けてゐたものらしく支局責任者には都城市内某小学校訓導川波哲郎（二八）＝假名＝

が中心人物として背後の某共産党員と連絡を取り昨年九月下旬都城駅前広場で始めて会見しその後本年一月その人物と自宅で会見したことがあるらしい。県特高課ではその人物が鹿児島県内に潜伏してゐることを確め鹿児島県警察部に逮捕方を依頼（後略）」

「背後の人物検挙で事件は拡大す 中に紅二点の女性も加り 関係者は青年教育者のみ 細胞組織による各班にはそれぞれ一名宛の責任者を設けてゐるが中には市内沖水村某小学校女教員岩城はぎ（二二）假名及び市内某官庁女事務員竹川はる子（二二）假名兩名が交り岩城は都城署に留置（後略）」

#### B-9 「宮」（7・3・26）

「鹿児島県で逮捕の赤化背後の人物 共産党に籍を有する日大出身 身柄は都城署に連行（前略）事件の背後に潜む人物の所在も突きとめ二十四日午後四時半ごろ鹿児島県警察部から特高課員が身柄を引き取り（中略）その人物は警察当局の見込みにたがわず共産党に籍を有し鹿児島市内に在住してゐた油田竹知（二八）＝假名＝である。

油田は都城中学校第二十二回の卒業生で日本大学を卒業してゐる。その郷里は今次事件に最も関係の深い北諸県郡沖水村祝吉である。目下都城署に引致されてゐる人物は皆同村某小学校に關係を有するものでオルグの責任者と目される都城市内某小学校訓導河浪哲郎（二一）假名及び北諸県郡中郷村某小学校訓導横川鉄助（二八）假名元同校に奉職してゐた事があり、又取調べを受けた女教員岩城はぎ（二一）假名及び代教員大川昭二（二八）は現在奉職中のものである。横川鉄助は宮崎県清武村の出身で大川昭二は東諸県郡木脇村の出身共に宮崎中学校の卒業生である。河浪哲郎は都城市内の出身者で独学で正科教員の資格をとり以前は文部省検定を志ざしてゐたことがある。彼等は共にプロレタリア文学の研究から共鳴しあひつひに津曲武治と連絡をとりプロレタリア文化聯盟新興教育都城支局の組織に着手し雑誌新興教育を直接取りよせ同僚の小学校教員等に何気ない風に読書会を組織しその会費を雑誌代にあててひそかに教員の赤化をはかつてゐたものである。（後略）」

#### B-10 「宮」（7・3・28）

「都城地方プロ運動の關係者引致さる 屋久森林観賞中の青年 宮崎県北諸県郡沖水村津島武秋（假名）は去る二十日頃令兄が熊毛郡下屋久村安房の某官吏に赴任し令兄に附随して山紫水明の仙境に太古の林相を賞観中果然其筋に引致（中略）同人は都城中学を卒業して目下中央大学生だと云つてゐる。」

#### B-11 「宮」（7・3・30）

「左傾教員等の検挙者二十余名の多数 農村労働者中等校出のインテリ 小学教員を目標に赤化の計画（前略）事件で去る二十七日までに取調を受けた者は市内第五小学校男教員二名女教員一名祝吉小学校女教員二名男教員二名梅北小学校男教員一名安久小学校男教員二名西岳小学校男教員一名元小学校教員二名中等学校卒業生四名郵便局二名其の他総計二十余名に上るらしく彼等一味は共産党一般使用人教育労働部の指令により農村労働者及び中等学校出のインテリを目標にした機関

紙プロレタリア科学及びプロレタリア文学並に小学教員を目標にした新興教育研究会発行の雑誌新興教育を配布して赤化を計るべく計画したものである。

「思想教育を児童に鼓吹 読書会の美名に隠れて盛んに活躍を継続 而して昨年夏頃日南教育新興研究会を組織し、越えて今年二月都城市に都城文芸研究会を組織して過般鹿児島県下で逮捕された北諸県郡沖水村祝吉津島成秋（假名）から巧妙な指導を受けて穩健な現職教員を同志に引き入るべく実行してゐたものである。なほ彼等は秘密のグループを設けてお互に連絡をとり表面読書会研究会の名に依ってカムフラージュしながら共産党指導下にある新興教育の研究會員を獲得し現職教員を第一線に送り文化サークルの名称により県下各地に種々なる研究会を組織し互に連絡をとって大々的に赤化を計画してゐる所を県特高課によって探知され今回の検挙を見るに至ったものらしい。左傾教員は〇〇及び〇〇否認軍閥資本家排撃を意味する童話殿様と三太郎を謄写版刷にして児童に配布して小学児童にまで手をのばし鼓吹してゐた。

「市当局善後策 前記左傾小学校教員が児童に〇〇及び〇〇否認の思想を鼓吹しゐることを知った父兄並に学校側では事の意外に驚き市学務課では二十六日午後市内小学校長を市役所に召集し善後策に関し協議し戸子田視学から爾後かかる不祥事を起す事なき様部下職員の監督を嚴重にするやう特に注意を促した。」

**B-12 「三州」(7・4・2)**

「未曾有の不祥事 左傾事件終局 一日全部の証拠品と共に事件を検事局へ (本文略)」

**B-13 「三州」(7・4・3)**

「小学校教員と北諸県の異動 頗る擴汎に亘る (本文略)」

**B-14 「宮」(7・4・13)**

「特に対策を講ずる 教員の思想善導 都城事件に鑑みて 十五日から開く教育支会長會議 本県教育会では十五日午前九時から宮崎図書館において本年度最初の支会長會議を開き事業計画について打合せを行ふほか特にさきに県特高課の手で摘発された都城地方を中心の教員赤化事件は何としても県教育界の一大不祥事として寒心に堪へないので今後の教員思想善導について研究対策を講ずると」

**B-15 「宮」(7・4・14)**

「左傾事件の処分で黒木視学官が都城市に出張す 児童への影響も調査 (前略) 県学務当局では既報の如くさきの県下小学校教員の大異動とは切り離れた関係者の処分を行ふことになってゐたので黒木視学官は十二日都城市に赴き警察側の取調べ結果を聴取すると共に被疑者を出した各小学校に至り今回の事件が内面児童に如何なる影響を与へてゐるかを詳細調査し十三日帰庁したが処分方法については、未だ検事局の取調べを終つてゐないので何とも語れない と口を噤み 児童の影響については別に影響と認むるものもなかった又教壇から児童へ結果を説いたことはないらしい、と語った。然し仄聞する処によれば被疑者の罪状明白で起訴されたものは懲戒免職、不起訴者は諭示退職又は長期謹慎被疑者を出した学校長は謹慎を命ずる模様である。」

## B-16 「宮」(7・4・23)

「ますます拡大する教員思想事件 首魁は宮崎署に留置 (前略) 事件はその後ますます拡大し都城某工場をはじめ宮崎の某校にまで飛火した模様 (中略) 首魁と目されてゐた山田冬秋—假名—の犯罪事實はいよいよ明白となり二十一日午後三時都城署から (中略) 宮崎署の留置場に留置されるに至った。」「事件益々拡大 引続き特高課で活動 別項——宮崎某中等学校教諭及び市内某製糸工場から都城市を中心の教員左傾思想事件の連累者を出したことは全く意外のことで (中略) 二十二日午前九時ころ年令四十才位の洋服紳士を課内に召喚重永警部補以下が嚴重なる取調べを行ったが右は市内某中等学校教諭らしく取調べは午後も続行 (中略) 取調べの進展に伴ひますます拡大の模様で可成り精巧な細胞組織の運動が行はれてゐるものの如く (後略)。」

## B-17 「宮」(7・6・7)

「都城赤い事件 全部起訴猶予となる 県民の耳目を聳動せしめた都城市における教員思想事件はその後宮崎検事局の鈴木検事の手で嚴重取調べ中のところ被疑者が小学校教員であり最近非常に悔悟してゐるのと犯罪が未だ処罰すべき程のものでないといふところから主犯以下一味を全部起訴猶予処分に附することに決定一件書類は都城検事局にこの程廻送された模様である。」

新聞報道は必ずしも正確といえないが、事件関係の記事は全体を通してみれば、特高が事件をどのように取扱っていたかという傾向はよくあらわれている。資料Aに示されている取調べ結果、たとえば治安維持法違反にもちこめなかったこと、新教関係事件として処理せざるを得なかったこと、刑事的には起訴猶予という結末であったことなどと、この新聞報道にみられる共産党関係事件としてデッチ上げようという意図的な発表のしかたとを対比してみると、当時の弾圧の性質がよくわかるであろう。また弾圧の展開過程もよく示されている。

検挙された人々の名前は殆んどが假名になっているが、他の資料から推定すると次のようである。なお年齢は正確ではないが、勤務校や経歴はほぼ妥当であると思われる。

B-4 横溝保——横山巖 (中郷村梅北高小)

B-7 川波哲郎——山元都星雄 (市内大王小)

B-8 岩城はぎ——永井登美 (沖水村祝吉高小)

B-8 竹川はる子——中馬某 (郵便局員)

B-9 油田竹知——津曲武治 (中央大学生)

河浪哲郎——山元

大川昭二——小山光 (祝吉高小・代用教員)

横川鉄助——横山巖

B-10 津島武秋——津曲

B-11 津島成秋——津曲

B-16 山田冬秋——津曲

## C 運動側資料

## C-1 新興教育 昭和6年12月号 28—36ページ

「教材研究 二 国語読本の取扱ひ方について——教材 卷六 第一 俵の山—— ××小学校  
島野雄二

- 一、内容をなすイデオロギーについて（略）
- 二、実際の取扱いについて（略）（一九三一・十二・二）」

## C-2 新興教育 昭和6年12月号 50—53ページ

「通信員便り 吾が支局の活動はこれからだ！」

十一月支局委員会を開催、過去に於て支局確立準備等のため不活潑であった点、新教の財政的援助の件を初め、

- 研究会の活動方針
- 通信活動を活発にする件
- 郡班の活動方針

等の協議事項をあげ、支局メンバー中、七名は即時準維持員となること、基金募集のキャンペに積極的に応ずること、研究会活動としては、支局メンバーの地理的な事情のため、郡班（現在二名乃至三名）を中心として日常の理論的武装のための研究に努力し、月一回の委員会を持つことにした。通信活動を活発にするため、支局メンバーの各人は時々、必ず新教の締切までに論文又は職場の吾々の階級的な通信、感想、創作等をもって、新教編輯方針の期待に応ずることを約束すること、四ヶ所郡、市班では、各学校、部教員会（部会）の青年教員による文学サークル、読書サークル、運動サークル等を巧に組織して、支局メンバーの拡大に努力することを決議した。特に郡班に於ける自由主義的読書サークルによる有益な経験が語られた。一ヶ月に五拾銭宛出して、改造、中央公論、女人芸術等のブルジョア雑誌や、プロレタリア文芸作品を読み、漸次サークルの仲間を意識的に啓蒙する方法で、すでにその班では二三名の支局メンバーの候補が成長しつつある。

支局メンバーの文化闘争の全分野に対する関心と結合を計るために、プロ科学、文学新聞、インターナショナルの共同購読をやることにした。

現在支局メンバーによって読まれつつある雑誌は「マルクス主義の旗の下に」「ナップ」「プロレタリア科学研究」等である。単行本では「プロレタリア政治教程」（自揚社）「支那問題講話」（プロ科研究所）「プロレタリア科学研究」（二輯）「プロレタリア教育の諸問題」（浅野）「日本歴史の研究」（佐野学）等が今月支局メンバーの読み得た主なものである。

今日の委員会は、午後の日程を、月例の研究会とし、満蒙問題を対象にとりあげた。当地の在郷軍人会、教育会等では、満蒙に於ける反動的軍閥のデマに応じて、連日、軍事講話や満蒙講演会が開かれ、××本部のマワシ者や、満鉄のブル共が派遣した向ふの校長の反動演説があり、大衆を

市民大会の名で×××戦争のために動員しようと血眼である。幼い小学生までが、一太郎やあい映画や、中村大尉映画で、映画業者と敵の足で踏みつけられやうとしてゐる。この際、満蒙及び支那本部を中心にした、資本主義諸国間の対立の階級の本質と、××の×機を明確に意識し曝露することは、何より必要である。同志Aは、この二週間の研究資料で、具体的に、明瞭に、満蒙の利権の擁護、居留民保護、等々の××軍閥の戦争理由の階級の本質を明かにして呉れた。更に各メンバーは、「支那問題講話」を通じて、この問題に対するより明確な意識の獲得と、吾々の闘争への結びつけに努力する筈である。特に、プロ科学の二同志が、今日の研究会に特別に参加し、最近に於ける満州問題を中心として、××ファシズムの急激な進展と、その具体的現れである、東京に於ける参謀××の青年士官××事件の歴史的意義を曝露して呉れたのは、有意義であった。

吾々は報告の最後に、新教のエネルギーな発展のための闘争を期待して、協力を誓ふ。誌代(十一月号)を受取って呉れ。

(九州、××支局)

### C-3 新興教育 昭和7年1・2月号 74—76 ページ

「文化サークルを作るまで 九州 黒潮生

十二月×日支局委員会で文化サークルにつき討議され、メンバー獲得の一策として広い意味の文化サークルを作り、我々のヘゲモニーの下に教育労働者と親しむ機会を作ると共に我々の影響を強め、その中からよい分子を讀者に獲得することが決定された。

職場に帰つた俺は早速文化サークル提唱の機会をねらつてゐた。が表面如何にもよくまとまつてまじめでありさうに見える學校程現在に於ては活氣に乏しい退歩的な教員が多いものだ。俺の學校にしてもその例に洩れない。校長を先頭に全職員足並揃へ一糸亂れずの外観をそなへ、形式的看板的な仕事は如何にも整つて見えるが、ブルジョア御用本だつて眞剣に勉強するものはほんの二、三名にすぎない情ない學校だ。

「よくまあ之で先生面が出来るものだ。」と赴任當時から驚いてゐる。然し女の方は例外にいいメンバーがあるために、盛に本の回讀をやつてゐる。殊に左翼の小説類が多く讀まれるには感心してゐる。

こんな情勢の下に如何にして文化サークルを作らふかに付いていろいろ考へた。下宿が散在して居り、お互にクソまじめに夕方まで暇ツブシの仕事を學校でやつているんだから、時たま遊びにいつても四人五人と寄つて話し合ふ機会なんて一度もない。目星をつけた若手四五人を一所に集め口火を切る事によつて彼等の間からサークル問題を持ち上らせねばならない。どうして四五人を自然に集めるかまづゆつくり腰を落つけて無駄話も充分出来る時間のある會合を持たふ。そして機会をつかまふ。

ところが丁後次の週まで營養週關<sup>77</sup>だつた。一年食ふ米のあるなしを心配してゐる貧農の子供らに、校長が長々と營養の必要を説いた事が耳新しく残つてゐた。早速個人的に近頃俺に最も親しくするKをおだてて營養會をもくろんだ。

肉をつついて大いに一夕栄養をとらふと云段取りだ。目を付けた連中だけうまく誘ひ出せた。宿はKの下宿，M，S，S，K おれの五人，土曜の晩雨はショボついてゐた。俺は一寸用事があつておくれていつたが，その時分には肉には附物の焼酎をあふつて新卒のK等すばらしい鼻息だ。一座はMをのけてほかはまるで陽氣極まる酒のフンキ氣だ。安來節，出雲節，おけさ節，心中小唄等々ありとあらゆる唄を大聲にどなり散らしてゐる。

この時おれはしまつたと思つた。之ではとてもまじめなサークルや座談會の提唱など出來たものではない。だが一つ之はMがあまりのまずだまつて外の連中のすることを本意なげにみてゐることだ。おれも愉快さうな顔をして大いに歌つた。その中肉も食ひ上げ一升の焼酎が平げられた。歌にもあいた。一同が火鉢を圍んで茶をのみはぢめた。Kだけは酔ひ倒れてゐるが，ほかは割に平氣だ。ぼつぼつ時事問題に上り，終に學校の不平不満のぶちまけに入つてきた。

ダレモーツノ不平ナシニ働イテル者ハ一人ダツテナインダ！

終に待ちうけた。然し目的はサークルだ。不平を研究問題に導く必要がある。

首席が村民のキゲン許りとつてゐるの，次席がボヤボヤしてゐるから受持の高二女がだらしなくなるの，増俸停止は事實上の減俸だ時の強制寄附に對する不平等次々に出る。其の勤勉家を自稱する反動教師Sが「又話が不平話になつた。」と云つて笑ひはじめた。ここで茶化してはだめだと思つたので「いや不平を言ふことは實に必要な事だと思ふ不平なしに進歩はあり得ないから」とまじめにさへぎると隣のSが「さうださうだ」と直に賛成した。そこで、「體操部の研究でも，國語部の研究でも，なる程名前はいいが眞剣に研究がなされたゐるとは思はれない。」と問題を切ると，今まで黙してたMが「シリ切れトンボさ」と皮肉る。そこで一しきり研究部に對する幹部級の無定見をお互にあばき合つて，「それでは一つ俺たち心に合つた若い者ばかりでかたくなならない今夜のやうな會合を持つて何か研究したらどうだらう。そしてお互の意見を闘はずことは常識を廣める上にも大切ぢやなからうか。」と豫定の問題をとり上げてみた。するととなりのSが，「うん座談會みたいなものを持つと面白いな。」と早速賛成した。Mも賛成した。も一人のSも賛成した。成功だ！胸がわくわくする「ウン座談會は面白い思付だ。形式はどうでもよいが漫然とした集りでは話が面白くゆくまいから一つ何でもいい，雑誌でもいい，中心になるものを決めてそれについての意見，感想等を述べ合ふ様にしたらどうだらう。」皆異議なし賛成だ。「文學ものなどはいいいことはないだらうか？」Mは國文學研究家だからだ。「文學物だつたらM君等よい冊子を知つてるだらう。あのサロンとか言ふ雑誌あつたね。」M，「うん，あつたあつた。まだ見たことはないが。」「あれはどうかと思ふ一つ氣をつけてしらべてみてくれないかね。」「うん氣をつけておこふ。それにしてもマルキンズムはどうだらう。おなじ研究するんだつたら。」とMがもちかける。これは大變，反動先生がびくつくに決つてゐる。「いや，あれもいいが，我々には少とむつかしすぎはしないだらうか，まあ最初は文學もの中心にやつてゆこうよ。文學にしたつて階級性はあるんだしプロ，ブルの二方面から論じられるから大分努力が要るだらうと思ふ。」S「うんそれがよからふな。」M「それを中心にしてお互なんでも自分に研究してゐるものでも，珍しいことは話し合ふことも我々の様にあ

まり讀書しない者には非常に爲になる。反動 S「そう、讀書したものに限らず、あらゆる不平や意見を持ちよつて、若いグループのよ論として學校の沈滞した空気を元氣づけることなんかもいいことだしな、もう今は學校長や首席のさしづによつて機械的に動く時代はすぎ去つたんだからな」ぼく「併し不平なんか云つたつて言つたものが損で同じ意見の者さへ、いざと云ふ時は知らん顔をしてゐるもんな。」M「いやそこが大衆的に一つ輿論として取上げられてはいないからこそさうなるんだらう。かういつた若い者の不平が持ちよつて個人的意見として意見をとり上げられない様にお互の不平不満、意見をまとめる會合としても必要となつてくるわけだな。かうすることによつて初めて個人の意見が生きて若い者が學校を引ぱつて行くことが出來るとおもふ。」「異議なしだ。」

酔つてゐる者には僕が後から話すことにして學校の仕事のひまなとき随時集まることにして大體月三、四回やること、場所は五人の下宿や宿直室を使ふことにして散會した。こんなことでマジメな文學を中心としたサークルを作ることに少しのむりもなく成功したな唯一つ文學新聞をポケットに入れてゆきがら當夜の情勢からそれを表面に持ち出すことが出來なかつた。しかし、之は急がんでもいいと思ふ。僕は今後サークルを如何に發展させてゆくか希望にみちて下宿へかへつた。

C-1の島野雄二は山元都星雄のペンネームである。これが山元の投稿であることは本人により確認された。C-1は当時の教育実践の具体的で詳細な記録としてきわめて貴重であるが、本報告では紙幅の関係で教育実践についての検討を予定していないのと、かなり長文であるので採録は見送った。C-2は誰が報告したものかは確定できないが、内容からみて都城の運動の報告であろうという山元の証言により採録した。C-3も確言はできないが、時期・内容から都城の運動の報告であろうという山元の証言により採録した。なおこの活動内容や學校の状況説明その他から判断して、祝吉校の小山光の報告ではないかとのことであつた。もしそうであると文中の新卒のKというのは昭和6年に宮崎師範本科一部を卒業した假屋健児であろうと推定される。

C-2, C-3は都城からの報告であるとの確証はないが、少なくとも報告されていると同様な活動を山元たちが展開していたことは山元の証言で明らかである。

#### C-4 「山元都星雄氏の岡野正氏宛書簡」(1974. 10. 18)

1. 出生 明治41年8月生 都城市に生れる。
2. 師範學校出身ではありません、高師中退後(20才)代用教員を経て翌年、正教員の資格をとり(21才)翌年、文検(文部省中等教員資格検定試験——国漢科)の予備試験に合格(21才)更に二年間の目標で高検(高等学校教員資格検定試験)準備中でしたが、途中から動揺し、マルクシズム文献に熱中し出しました。(22~3才)。

3. あの頃(昭和初期)の教員のタイプを類別してみると(宮崎——或は狭く小生の範囲を見渡した場合)

A 名訓導型(謂わば、聖職をもって任じている教師群)概して師範出に多く、首席→校長→視学

の出世コースを狙っている。——このタイプが恐らく60~70%以上をしめていたか。

B Aとは異った意味の立身出世待望の教師群、これはやや新鮮でやや進歩的で（ブルジョア自由主義的）若い教師達を惹きつけていた。小原国芳（成城学校）其他の各イズムを掲げての教育論に呼応して教育実践を試みる一群が即ちそれです。——どの学校でも、こんな教員が何人かは大低いた様です。「生活綴方」？運動等もこのタイプから出たとも思いますが、これは後にあげる革命的実践型に発展移行して行きます。

C A・Bのタイプとはつかず離れず、やや孤独の立場にいて、コツコツと学究生活に、諸芸術の各分野に分け入って、これを楽しむ一群、或はカントとかヘーゲルとかに熱中する哲学青年教師あり、文検、高検に猛迫するものあり、文学教師あり、其他の芸術創造に打込むものあり、余暇をすべて体操（競技）に熱中するスポーツ教師あり、で、概してA型の名訓導型を軽蔑していた様です。しかし、文検、高検を狙うものたちは、一種の立身出世型とも云えましようが、勉強するのに、一つの目安として、受験を志すものもあった様です。

D 最後が革命的教育労働者群、これはパーセンテージとしては最も少いですが、矢張当時の風潮を感じ取って、変革的潮流に無関心ではいられなかった同伴者的一群も相当にあった様に思われます。新興教育、インターナショナル、プロレタリア科学、戦旗、産労時報——ナッフ等々は市内の一書店に次々に入荷しましたが、殆ど売切れまし、その店は、教員が大部分の客だったようですから、大部分が教員によって読まれたと思われま。或時は、数冊まとめて（何か教程か、入門書のようなものだったと記憶していますが）注文した連中もいた様です。

以上の類型は、大ざっぱで、どの型にも類しないものもあろうし、又、どの類型にも重なり属するものもあります。小生達もBでもあったし、Cの場合でもあったろうし、最後にはDであったわけです。

#### 4. 次は小生の思想発達の過程と革命的実践への道程

小生は6才の頃、洗礼を受け（組合教会派）以後、青年期に到るまで、熱心なクリスチャンでした。賀川豊彦の影響を強く受け、当時の大ベストセラー「死線を越えて」は繰返し読む程の熱心ぶりでした。そして小生は、少年の時代から（姉の感化で）文学に熱中し、青年時代には、色々な雑誌、新聞に投書してました。読売新聞・日曜版にも何回か当選し、入選や佳作も何回かありました。文学界、文章倶楽部は、殆ど小生の作品が載らない時はない程でした。しかもジャンルは多様で、短歌、俳句、狂句、小品、短詩、長詩、小説、何でもこなす方でした。高師に入った頃は、プロレタリア文学が、まさに熾んになろうとする頃で、二、三の同好者と争い読みました。しかしまだその頃は、プロ文学に若干批判的で、その社会的意義なり、革命的価値など、理解し難いものでした。

心臓脚気がひどくなり、休学して帰郷したのですが、たまたま家の破産に会い、療養中にも拘らず、代用教員に就職して家計を助ける破目に到りました。そこで進学を諦め、半年後正教員の免許を受けましたので、続けて、一年後文検を、二年目には高検をパスしようと志し、学校出よりも、

最短距離で、生活の安定を図ろうと企てました。そしてその頃は将来は歴史小説家として進む計画をもっていました。(できれば、晩年、鷗外が試みた史伝的作品を、真に興味深い歴史小説として構築したいという野望に燃えていました。) 教員となり様々の事柄にぶつかり、漸次、社会の矛盾に気づくと同時に、たまたま求めた「新興教育」が、教員としての社会的存在、己れの住む世界の新たな認識に、鋭い照射を浴びせてくれました。それからは凄い勢いで、進歩的出版物をむさぼり読みました。あの難解で、誤訳の多い高島素之の「資本論」をはじめ、改造社の「マル・エン全集」に取り組んだのもその頃です。又一方、教育労働者文学理論の構築(プロ文学理論、農民文学理論と同一の範疇と同等のレベルと資格を荷った)を(蔵原惟人理論を念頭におき乍ら)作品実践と共に企図したのもその頃です。まだ文検・高検を諦めたわけではありませんが、ウエートの比重の置き方が漸次変って来ました。

5. やがて同志たちとの出会いがやって参りました。(23才)小生の教室に、見知らぬ青年が三人(津曲武治、小山光、横山巖)がやって来て、小生の論文や作品を読んで感銘したというのです。(宮崎県教育、宮崎新聞、大分新聞其他が、小生の常時の発表機関でした。初対面乍ら話がはずみ、再会を約して別れましたが、間もなく、小生がチューター見た様になって(津曲は間もなく上京)会合を持つ様になり、漸次同志も獲得し、初めは「新教支局」併せて「ナップ支局」その後間もなく、吾々の組織「日向新興教育研究会」(資料の「日南一」は間違い)へと発展し、翌年三月弾圧されるまで組織活動をしたわけです。

6 その後のメンバーは、次に記す以外は忘れてしまいました。谷口訓導(北諸県郡西嶽小学校)宮崎百太郎教諭(宮崎県立都城高等女学校)阿万訓導(X小学校)中山代用教員(X小学校)

7 「都城文芸研究会」の事ども。組織のセクト打破、大衆化、メンバー獲得等を企図して会は結成されました。発会式は「都城文芸講演会」と題し、講師として第七高等学校(鹿児島)の新屋敷教授を招きました。参加者は七、八十名と記憶しますが、終了後、座談会に切りかえ、席上、文芸愛好会の結成を呼びかけて、十数名の賛同を得ましたので「都城文芸研究会」の名称で、以後、何回かの集会を開き、会員の中からメンバーを何人が獲得しました。

8 組織も拡大し、教員以外のメンバーも増えて来ましたが、初めからの文学サークル的性格から、なかなか抜け切らない為、組織の改編が行われ、基本的組織として、全協・一般使用人組合・教労部に、山元をキャップとして他二名(佐藤訓導他一名)が参加し(これは上部から鹿児島県の同志を紹介されて、これと合同で「南九州支部」として発足)他に大衆組織としてコップ(ナップ解消後結成された全日本文化聯盟)の支部を設置しました。そして吾々のメンバーは、様々のサークルの中でフラク活動中、検挙されました。

9 「赤いチョーク」(機関紙)の件、これは「日向新興教育研究会」の機関紙でした。これの配布は主としてメンバーだけを対象にしましたが、シンパや、割合に社会的意識が高いと目される準メンバーにも配布しました。部数は30部か40部位刷った(ガリ版)と思いますが、何部かは常に小生等の手元に残っていました。残部も、印刷中のものも検挙された時、全部押収されましたか

ら、もう何処にも残っていないと思います。機関紙の編集責任者は山元でしたが、執筆者は常時五、六人だった様です。最初はプロ文芸雑誌的内容でしたが、漸次、革命的な要素を加えて来、特に、教育現場の生のレポートや、教材研究には出色のものが出て来て、機関紙として、高度の内容を持つ様になり（つまり組織者としての機関紙的内容に発展し）組織の拡大につれて機関紙も質量ともに大飛躍を迎えようとした処で弾圧されたわけです。

機関紙は毎号「新興教育」に郵送していましたが、その中の論文が二回「新興教育」に転載されました。一つは貴方の論文にも出て来ます島野雄二（山元都星雄のペンネーム）の「国語読本の取扱い方」もう一つは同志のものですが筆名も題名も思い出しません。確か内容は修身科教材の階級的分析だった様に記憶しています。

機関紙の内容は様々でしたが、末期に力を注いだのは、教材研究（階級的な分析）と教育現場のリアルな報告——記録でした。そしてオルガナイザーとしての機関紙の発展を目論んだわけでした。今一番印象的なのは、検挙される一ヶ月位前でしたが、同志佐藤訓導が、公開授業研究会で、市内教員二百名位を前にした公開授業と研究会の件です。これは機関紙の号外として、約5、60頁位のやゝ龐大な記録を発行し、「新教」にも送付し、これが「新興教育」への転載方を依頼しましたが、間もなく検挙されましたので、どうなりましたか——。

同志佐藤が、公開教授を担当する事が決まると、吾々は早速「対策委員会」を作り、教材の研究、教案の作製、父兄対策、視学校長対策、参集する教育労働者への対策、佐藤の発表する研究内容の検討、草案の共同製作等、精力的に取り組んで、その日を迎え、大体に於て成功しましたが、しかしこれは敵に打撃を与えるよりも、寧ろ、敵の襲撃を早める機会を与えた様でした。それから一ヶ月余りで検挙され、その時の事を根掘り葉掘り聞かれ、思わぬ口実を彼等に与える機会にもなった様でした。

10. 「殿様と三太郎」の件、これは山元の創作で、初め、県の官制教育会の機関誌「宮崎県教育」（これには小生の文章が十教回のりました）に発表後、若干改作して、千五百枚位（資料にある六百枚ではない）刷り（新聞紙の二頁型に裏表ギッシリ。熊本の印刷所に依頼印刷されました）大王校（小生の勤務校）の四年生以上全員に配布、残り三百枚位を教材にするべく、同志達に分配しました。最初「山元都星雄」の署名入りでしたから、校長等も、そう気にしなかった様です。というのは、小生が、本名やペンネームで、県の機関誌や県内外の新聞雑誌等に、様々の作品を発表して、いささか、物を書く人間だ、という風にみなされていたので、特別な眼で「殿様と三太郎」を注目しなかったからだろうと思います。しかし、その後一ヶ月もたってからでしたか、校長から、視学からの苦情を告げられ且つ、要注意人物としてマークされている旨告げられました。（校長は小生の小学時代の恩師で、小生に対しては至って好意的でした。）

11. 同僚教師の評価、その他 同僚教師は、若い人たちは、小生の書くものをいつも喜んでくれていましたが、上席の人達はそうではなく、寧ろ多分に批判的であった様です。特に「殿様と三太郎」の発行に際しては、首席教師は言葉鋭く「山元君、学校の費用で印刷するものだから、吾々に

も内容などよく相談してからにしてくれないと困るではないか。一方的に偏した思想を全校にバラまかれては困る」と叱ったものでした。他校の同志たちも大なり小なり、そうした悶着があった様に記憶しています。この様なことは、間もなく都城全市の教員間（全市六校千二三百人位）にも広がり、「山元は赤い教員」のレツテルをはられてしまいました。検挙された当時、県内発行の二三の新聞は「赤化教員検挙さる——首魁は市内某訓導」と大見出しで報道していましたが、後で聞くと、誰でも直ぐ「山元」だとわかったとっていました。

12. 会を、発足当時の文学サークル的性格から脱皮させ、真に革命的な組織にする為に、小生等「全協」に加盟し、その指導下にはいった途端に検挙されたわけですが、しかし、僅か十ヶ月足らずではあっても、組織そのものの発展の速度は目覚ましかったと思います。自他に於けるイデオロギー変革の所作に止まらず、組織的行動——大衆的実践的行動にまで、発展しつつあった事も事実です。父兄会の自主的運営の指導、校長や後援会（町の有力者の組織で、大抵の学校にあって、寄附要請や、学校の運営等にも強力な発言力をもっていた）に対する要求、（具体的には宿直、日直の条件改善、備品の整備、参考書の購入計画への参加、休日の完全自由の確保等）其他色々あった様に思いますが、何分にも活躍の時期が短かく、盛沢山の計画も、組織の潰滅と共に消失してしまいました。

13. 警察のテロについて。特高による拷問は、多喜二の「三・一五」程ではなかったにしても、矢張り大変でした。発狂して、後、自殺した人（種子田同志）もありました。家出して行方不明になった婦人同志もありました。小生も竹刀でなぐられ、二三回気絶しました。特に全協（教労部）加盟について、その証拠をキャッチしたかったらしいのですが、組織がまだ小さかった事と三人の同志の口が固かった為に、テロもその効果を上げないで済みしました。

14. 小生は拘束されてから漸次衰弱し、釈放後（6月の半ば）も半年位は寝たり起きたりでした。やがて恢復しましたので、昭和8年2月上京し、神田に「新興教育研究所」をたずねましたが、既に居所不明でした。研究所に行ったのは、会の始末を報告すると共に、出来れば新教或は教労部で骨を埋める計画を立てていたのですが、駄目に終わりました。（その後の戦時下での唯研や、研究・執筆活動、そして19年の弾圧の記述があるが省略する。）

15. 津曲同志のこと（戦後の津曲との出会いについての記述があるが省略する。）

16. 往年の小生等の運動を回顧してみますと誠に幼稚であった様に思います。ああすべきだった、こうやるべきだったのだ、等々色々考えを巡らせば欠点ばかり目立ちます。思想も未熟、知識も生半可、初歩的な組織論さえ知らなかった仕末でした。当時の小生等としては、致し方なかったのかも知れませんが、誠に幼稚な運動であった様です。しかし、あの純粋にして果敢な闘争心——革命的勇気、誠にほむべき己れの青春像であったと自讃しています。以後、現在に至るまで、マルキストとして、自らの節操を保って来たつもりではありますが、小生は常に、己れの青春像を鏡として、きびしい省察を加えて来た感があります。何れ迎えるであろう墓所に、小生は誇りをもって、かの若き日の革命像を携え行かんと欲するものです。呵々大笑。（中略）

思いますに、歴史の発展過程は、客観的な法則——真理に支配されています。歴史の研究は、つまり、歴史的真理——歴史的法則の追究であり認識です。それは現在を照射し、未来を指示します。教育が、直接的に、強力に、国家・民族の消長—命運に関わるものならば、教育労働運動の発展如何もまた、同様の価値評価が行われねばなりませんまい。(後略)

この山元の記録は資料 A-2 を手がかりに記憶を書き綴ったものである。北海道の岡野正氏の御好意により採録させていただいた。

#### C-5 山元都星雄氏の小田真一氏宛書簡 (1975. 3. 20)

1. (前略)「日本のヒューマニズム」(岡本注——山元著 昭和15年刊)について、あの本は思い出もあり、感慨もあるのですが、序文などには「奴隷の言葉」(レーニン)があり、内容も検閲を顧慮して、大変な制約を受け乍ら書きましたし、そして編集部での改削等、満身創痍の著述でした。当時、抬頭して来たヒトラーの文化弾圧や自由への挑戦があつて、世界の進歩的陣営の憤激が湧き起り、新たに人権と文化の擁護が叫ばれてきました。ファシズムの荒れ狂いつつあつた日本でも、そうした様々の動きがありました。小生もまた、この旧著を書きながら、小生をも含めて「風にそよぐ葦」のいくらかの勇氣と心のささえになれかしという気持でした。(中略)では次に、御質問に簡条書きで御答え致します。

① 出身校について、東京府立四中(小生は小学校6年生の時、東京芝区の伯父の家に貰われて行きましたが、高師—東京—入学後まもなく伯父が死去しました。)

② 全協(教労部)加盟の時期。昭和6年11月か12月頃、小生等と連絡がとれた南九州支部の同志の一人——鹿児島県の同志については、ただ住所が「何とか島」という記憶しかないわけです。そして今ぼんやり思い出しているのは、××小学校宛に、レポや小生等の機関紙(赤いチョーク)等を発送していたような記憶です。先日岡野正氏の御手紙によると、その鹿児島県の同志は、現在日本共産党大阪府委員会の常任活動家——名越祐助氏ではないかと推定されておりますが、まだ確認してはいないということです。

③ 教材研究について。小生(島野雄二)執筆の「国語読本の取扱い方」もそうでしたが、機関紙「赤いチョーク」に色々な教材研究を掲載していました。「新興教育研究所」にもこの「赤いチョーク」は毎号送附しておりましたが、小生の「国語読本……」(「新興教育」掲載文)もその「赤いチョーク」からの転載だったのではないかと思います。或は「赤いチョーク」に発表した後、同志たちの批判を取入れて若干加筆か訂正して研究所に送附した様な気持もしますが、どうもその辺がはっきりしません。他の同志の「修身科」の論文も、矢張同様の操作を経て研究所へ送ったのかも知れませんが、そしてそれが誌上に転載されたかされなかったかも、はっきりしませんし、従ってその内容や筆名等も全然記憶の中にありません。

④ 「殿様と三太郎」の原本はありません。

⑤ 神保町のビルに行った時は、研究所は既に閉鎖されていましたが、懐しく様々の感慨がこみあげて来て暫く研究所の前にたたずんでいました。その事務所の確か斜め前に「農民闘争社」の標札が掛っていたのをはっきり思い出します。農民闘争社は、当時の農民組合の革命的流派（名前は忘れましたが）の機関誌？「農民闘争」の出版社ではないかと思ひ、この前でもウロウロしました、この時期に貴方と連絡がとれていたら、小生のその後の運命も大変変わった経過を辿っていたらと思ひます。

⑥ 小生の著作リスト（省略）

⑦ 昭和19年の弾圧について（省略）

⑧ 戦後の年譜（省略）

これは教育運動史研究家で戦前同時期に中央で活動されていた小田真一氏の質問に応えた手紙で、小田氏の御好意により採録させて頂いた。なお省略した部分は当時の運動の活動家が弾圧後新しい分野でどのようにその運動の精神を持続させていったかを物語る貴重な証言であるが今回の報告では紙幅の関係で割愛した。

C-6 「山元都星雄氏談話」 聴取記録者岡本洋三、聴取年月日 第一回1975年7月13日、第二回1975年7月31日 第三回1975年8月20日

談話内容は、前記書簡と重複する部分をはぶき、項目をたてて整理した。また明らかに記憶ちがいで談話のなかで訂正されているものは、訂正された内容で記した。同一の事柄について談話の内容がちがうもので、いずれが正しいか判別しにくいものは、そのまま記録し、その部分については聴取の時期を①②③で注記しておいた。

### 1. 生いたち

父の職業は華道茶道教授その他伝統的な礼法小笠原流礼式、のし紙でいろいろつくったり、儀式のしきたりなどを家で教授するとともに、近辺の女学校、鹿児島末吉などにも行って教えていた。祖母が都城島津藩の下級武士の出で、母方の祖父が柔術師範で町道場をもっていた。父方の祖父が茶道などをしていた。下級武士で幕藩解体でいくらかの秩録をもらっていた。そのような封建的なものがしみこんでいた家庭であった。

私は小さいときからのクリスチャンで、母は仏教・日蓮宗で、父は組合系統のキリスト教でした。僕も3才か4才のとき洗礼をうけ、高師時代もそうですが、非常に熱心なクリスチャンでした。

小学4年の終り、東京の親戚の家に預けられた。最初は芝区西久保巴町にいたが後に中野に移った。中野が永かった。それは家が貧乏していたのと、伯父に子どもがいなかったこと、そして私が勉強好きだったので勉強するなら東京に出た方がよいというので養子のような形で東京にいった。中学は最初、芝中学にいったが、上級学校にゆくなら府立四中がよいというので途中から編入試験

をうけて四中にかわった。①（東京にでたのは小学4年の夏休み、8月だったと思っている。芝中から一回都城中に戻って1年間いた。3年のときだったか。途中で何回か都城には帰った。5～6ヶ月休学したりしている。しかし進級は普通にした。四中には4年のとき移ったと思う。②）

中学を卒業して高師国文科に入学した。震災の翌年だったと思う。高師は1年2ヶ月位の在学で病気のため中退した。① 中退したのは夏頃で、まだ心臓脚気でムクミがあったが家の破産で、代用教員になった。②

最初、都城の沖水小学校に代用教員としてつとめた。（20才）そして正教員の免許をそこでとった。2回試験をうけたと思う。それから大王小学校に訓導としてつとめた。（21才）

## 2. 思想形成とのかかわりで、

沖水のときには文学青年的な仲間はいたがとくにサークル的なものにはなっていなかった。昭和6年、津曲氏らが訪れるまでは運動的なことはしていなかった。私は高師は中退したが、文検、高検をとって学友たちより早く資格をとってみせるぞといった稚気満々たる気持で勉強していた。ところがあの頃そういう野心と同時に、一方ではプロレタリア文学の隆盛にならんとする時期でそれにだんだん惹かれていった。そんなときたまたま佐藤君（大王小の職員名簿をみて国夫という名前を思い出す）が新卒で大王に入ってきた。学年はちがうけど同じ国語科の部員として1ヶ月たらずのうちに非常に仲良くなり意気投合し、文検、高検の受験計画を話すとそれじゃ僕もやると、二人で競って勉強した。ところが僕が次第に思想的に変っていくと彼もその影響をうけ、形影相俦うというように変っていった。そういうように佐藤と一諸に勉強したという以外、とくに組織だったことはしていなかった。

その頃、宮崎に用事で出て「新興教育」（雑誌）をみた。それは一つの驚きだった。創刊号や前の号がみたくて、出版社自由社に注文した。5～6冊か10冊位もあったか、送ってきた。発禁か何かで全号は送ってこなかった。創刊号でしたか、山下徳治の論文を読んで感心した記憶がある。津曲君たちが来たときはもう「新教」を読んでいたから、それは昭和6年のはじめの頃（春？）だったろうか。

「戦旗」や「ナップ」も最初は都城の金海堂書店の店頭で買った。あとからは直接購読にした。この金海堂は後に私たちのシンパになってくれた。あの頃は随分さまざまな雑誌をとった。それで大王小では佐藤君と「戦旗」や「ナップ」を一諸に読んだりした。それから急激に意識の変革に迫られ、文検、高検の準備がおろそかになっていった。しかしまだはっきりした方向をつかんでいたわけではないので、なんとかして文検だけは早く合格しなければと二本立ての勉強は一生懸命やっていたが、しだいにその比重が変っていった。

ものを書き発表するようになったのは中学校の頃からですが、教員になってからも色々書いた。それは主に図書費を捻出するためたとえば作家の加藤武雄や新井格が来て講演するとそれをなるべく長たらしく筆記し引延ばして送ると本の二、三冊分位の原稿料になった。しかし自分が組織をもつようになってからは殆んど書いていない。当時書いたのは先ほどのような文士の講演筆記や方

言の出典の問題——都城には色々面白い方言があるので国文学の文献に散見するものを集めて研究したもの何回かにわけて発表した。最近になって小学館の日本国語大辞典で参考文献の紹介の中に、私の都城地方方言蒐集がでていることがわかったが、これは多分それからとったものだろう。

都城には三州日日新聞というのがあって、これは何でも書かしてくれた。ここで1年間位つづけて書いたこともある。そのようにいろいろ書いたことが津曲たちが訪ねてきたときも話題になった。その中に、三・一五事件を扱って書いたものがある。今からみると恥かしいもので、小説の体もなしていなかったようなものかもしれませんが、いや面白かつたとほめてくれて、同志的結合がなりたったのだった。

それから大分新聞から頼まれて5～6回書いたこともある。福岡日日新聞（今の西日本新聞でしょうか）その懸賞に応募して二等でしたかになったこともある。いずれも小説で、今記憶しているのは「死刑囚の手記」という題で書いたものです。それは私が虚無的な気持になった時期のものである。私は前にも話したように熱心なクリスチャンで教会にもよく行った。賀川豊彦には心酔していたし、東京にいたときには本郷の有名な教会で小原信道（小崎弘道のことではないか——岡本）に非常にかわいがられ、牧師にならないかと云われたほどだ。それが少しずつマルクス主義にひかれ、その反宗教の思想との間で矛盾に苦しみ、非常に虚無的な気持になったことを覚えている。

アナーキズムには余り関心はなかったが、大杉栄にはひかれた時代があった、とくに大杉・伊藤野枝、そして橘宗一という幼子が虐殺されたという事件で、大杉には愛惜のようなものを感じたし、大杉のすばらしい名文に感動した、あの虐殺事件で私は非常な衝撃をうけ、それがきっかけで軍部批判が芽生えたように思う。一燈園の西田天香などにも一時期ひかれたことがある。高師に入る前後にそのようなさまざまな思想にひかれた、それはキリスト教にたいする懐疑というか、それだけでは充たされないということが色々なものを求めさせたのだろう。こうして次第にマルクス主義の方向にすすんでいった。

福本の「理論闘争」がでた当時は未だ読んでいない、あとから買って読んだがその頃にはもう批判的に読んでいた。戦旗は「新興教育」と出会う一年位前から読んでいたと思う、昭和五年頃か。

「三州日日」の「創作労働者 T・S 生」（昭和6年2月13日、14日2回掲載）は私が書いた記憶がない。「嘆きの塑像」（三州日日、昭和6年2月から4月にかけて19回以上連載）これは思い出した。これが津曲たちが来たとき話題になったものだと思う。横山巖は「よく思い切って書いたものだ」といっていた。

### 3. 運動への参加と同志たちについて

津曲たちとの出会いを契機として運動にふみこむが、津曲たちとはそれまで全く面識がなかった。横山については新聞か何かに書いたものを読んでいて名前を知っていたように思う。しかし、はじめ来たときは本名を名乗っていなかつたと思う。最初三人が訪ねてきたとき、私が書いたもので目をつけ相談して来たような感じだった。私の書いたものが話題となり、共産党のことなども話にでた。津曲は祝吉小の近くの人で当時は中央大学に籍があったと思う。津曲と小山、横山とはす

で知り合いのようだった。どういふ関係かわからないが、中学校の同級といった関係ではなかつたようだ。小山は都城の生れではなかつたと思う。津曲は夏休みで帰ってきていたのだろう。横山は慶応かどこかに籍をおいたことがあるようなことを聞いたことがある。この人も病弱で、病気のため郷里に帰ってきたように聞いている。

津曲らが来てから、また2～3日か4～5日かしてから直ぐ会って研究会をつくる話がまとまった。津曲は東京で仕事をするということで帰ることになり、私と小山、横山の三人で研究会を発足させた。それに前からの友人の佐藤君が参加し、そのあと阿万君が参加する。阿万君は安久小で、彼は佐藤と師範が同窓で非常に誠実な男だということで会い参加してもらった。地理、歴史の専攻だったと思う。それから種子田君が参加した。文部省の資料では安久小となっているが、これはちがうと思う。私が訪ねていったので覚えているが、だいぶ山の中の学校で哲学青年でした。講演だったか研究発表ですか何とかなの哲学の基礎といった題で彼が話したのを聞いて、それで注目したように思う。阿万君は会結成後すぐ加入した。種子田君も7月中に入っている。

宮崎百太郎との出会いは、僕が都城の金海堂にマルクス経済学のテキストを7冊注文し、それを受取りにいったとき、そこにいた。あとで宮崎君が本屋の主人に私に紹介してくれと云ったらしく、本屋が宮崎君に会うようにすすめた。宮崎は都城高女の歴史の教師でした。そこで私が宮崎の自宅を訪ね、私は佐野学の日本歴史の本をもっていき、自分はこういうものを読んでいるといったことから色々話をした。彼は部厚いスクラップをみせてくれた。それは朝日、毎日など色々な新聞の切抜きで、社会運動、研究会、SS会あるいは共産党の弾圧などの記事を集めていた。宮崎はこういう運動に関心をもっているということで、私が書店でテキストを7冊もまとめて買ったことからそのような集まりに自分も参加したいということだった。そこで実は自分たちは組織をもっているということを打明けた。彼はその話になるとここではまずいから外に出よう（お母さんに聞かれてはまずいということで）家の近くの姫城山に行って話した。そこは昔の城趾です。夜遅くまで色々話し合い彼は是非他の同志にも会わせてくれ、そして自分の役割なども決めてほしいと積極的だった。こうして宮崎君も私たちの同志になりました。彼は広島高師の歴史の出身でした。それから、谷口君、この人は都城の近くの小学校の教員でした。

メンバーではなかったが周辺の人々について、大王小に鈴木ミツという女教員がいた。この人とは非常に隔意なく話していた。彼女はヒューマニズムで十九世紀ロシア文学の愛好者でドストエフスキーなどを好んで読んでいた。私たちの活動にも理解を示しカンパをしてくれたり色々援助してくれたが、組織の人にはふみきれなかった。準会員でした。

中山あやさん、この人は都城の中山医院の娘さんで、私たちが後に組織の拡大強化・大衆化のためサークル活動をしようじゃないかということで文芸講演会をしたときの聴講者の一人でした。そこで地域別、学校別に文学愛好者のグループをつくり班組織にしたが、その居住班の一人で非常に文学好きの女性でした。この人の妹さんになつ子という人がいて、この人もシンパのようになっていた。なつ子さんはおとなしい人でしたが、活動には積極的で運動が弾圧された後にも再建のため

に協力してくれた。この人の友人で郵便局員の中馬という美しい女性もシンパ的な存在で文学サークルの一員でした。

学校の先生では、都城東小学校の菊池武望さんは文芸愛好者でプロ文学にも理解をしめし文芸研をつくったときには卒先して入会した。大王小の後藤千代さんは宮崎師範の専攻科出身で、同じ学年を受持っていたことから仲良くなった。文学少女で知識欲にもえ、なかなか活発な人でした。地主の娘さんで運動にはむしろ批判的でしたが、新興教育なども読んでたし、カンパもしてくれたが、運動に深入りすることは警戒し私を引き止めようとしたこともある。また大王小の永井イトさんにも機関紙の「赤いチョーク」をわたしたことがある。この人はあまり積極的ではなかったが、妹さんの永井登美さんも先生で祝吉尋常高等小学校に勤めていた。妹さんの方が非常に積極的だったようだ。当時色々の人を運動に参加させようと働きかけた。よく勉強しているとか、真面目に物事を考えるとか評判をきいて出かけたが、失望する方が多かったと記憶している。

#### 4. 活動について。

「新教」の組織をつくる以前、私ともう一人とで「ナップ」「プロ科」の支局をつくったことがある。その人のことについては殆んど覚えていないが、佐藤君などと会う前の時期です。その人は東京から病気のため帰郷してきていたが、もう結核の第三期という状態だった。どういうきっかけで会ったのか忘れたが私の家に来て左翼関係の本が沢山あるのでビックリしてそれから色々話しがあうようになり、二人で「ナップ」「プロ科」の支局をつくったが、まだ明確に組織運動を意図していたわけではなく、私もまだ小学校教員の状況から抜け出そうとして文検の勉強に熱を入れていた時期なので、それ以上発展しなかった。その人はまもなく亡くなった。

はっきりと運動への道をふみ出したのは、津曲たちが訪ねてきた昭和6年7月の頃である。教員組合運動の関心は、「新興教育」を読むようになってから急速に強まった。山下（徳治）さんの朝鮮の事件などに衝撃をうけ、何んだか自分の将来の姿をみる思いでじっとしておれない気持ちになっていた。しかし、それまでは私はどちらかといえば閉じこもる方で、若い教師たちのピンポン会とか独身会なんかには殆んど顔を出さず、変人といわれていた位でした。しかし、マルキストとして生長するには、これでは駄目だという反省もあった。そんな時期に津曲たちが来た。それで直ぐ、研究会をつくらうという事に話がまとまり「新教」支局をつくったのは昭和6年7月直ぐのことと思う。新教支局は日向新興教育研究会という名称で、そのメンバーは、山元、小山、横山、佐藤、阿万、種子田、谷口らが中心だった。はじめは学校別に班をつくり、それぞれがグループで活動した。今あげた人々がそれぞれの班の責任者でした。新教のメンバーと影響下の人との区別ははっきりあった。メンバーは7人じゃなかったか？宮崎さんは活動は活発ではなかったがメンバーだったかも、このメンバーが集まって全体の活動について相談したり、各班の活動を報告しあったりした。各班毎の研究会や集まりには他のメンバーは出ませんから、それぞれの班にどんな人がいたかは知らない。各班は必ずしも固定した組織ではなく問題によって随時シンパ的な人を集めて研究会やら座談会などをやっていた。メンバーはそれぞれ自分の得意とする哲学とか歴史とかで勉強を

組織したり、学校内のことを話し合う会をつくったり、メンバーだけで運動のすすめ方を議論したりした。

私たちの組織の機関紙「赤いチョーク」はメンバーの他、シンパや傾向の良い人にも配ろうというので30部位はつくった。原稿が集まらなくて1枚位のこともあったが、大抵は10枚位はあった。これを二つ折りにして綴じて冊子にした。編集は5人位で僕が中心になっていた。執筆者はメンバーの他に短歌・俳句（いわゆる傾向短歌というものではない）などが読者から投稿されたこともある。機関紙は3、4人部屋にとじこもって徹夜して書きあげた。最初に主張欄があり、これは毎月私が書いた。教育労働者としての自覚をうながすようなもの、そして当時の至上命令である帝国主義戦争絶対反対、団結せよ、いかに闘うかということをおまわりして最後に書いた。のちにこれには批判が出、ただ尻を叩くような論文ではなく、実質的に教育労働者としてどのように生き闘うかという地味な論文が欲しいという意見がでた。同時に教材研究への要求もたかまってきた。皆、教材をどう見るか、どう教えるべきかに悩んでいたもので、早速皆で研究しようということになり、何回も研究会で話し合い、国語は僕と佐藤という風に分担をきめて、報告者をきめ教材批判をやった。そしてそれを「赤いチョーク」にのせた。その他、マルクス主義早わかりのようなもの、資本主義のからくりとか階級闘争、フョエルバッハからヘーゲル、マルクスへといったものを私が書いた。政治・経済情勢については一般的なものを「プロ科」「新教」などを引用して書いた。他に質問欄も1～2ページあった。その他学校内での出来事、各班の活動などがある。「赤いチョーク」は月2回位の発行だったが、あとになると3回位も出したように覚えている。

学校内での活動は、いたって小さなことですが、教師の要求をとりあげて闘った。日直で何か問題があるとその責任をとられるという制度上のことから、宿日直手当を直ぐ支給せよ（当時小学教員は給料も低く生活が苦しかった。ところが手当がいつも遅れるので、アテにしていたのがはずれて困ることが多かった）また首席などは宿直を若い教師に押しつけるが、その宿直料を支払わないで学校の財源にしてしまう慣例があった。これに対して代直にもちゃんと宿直料を支払えということをおまわりして校長に要求したり職員会議で問題にした。また大王校では地域のボスが巾をきかせ、私たちが放課後テニスなどしていると「先生方、教材研究は終わりましたか」などと嫌味を云ったり、運動会の慰労会などにも多額の寄附や酒を出すかわりに一諸に同席して色々と干渉することがあった。それでボスの排撃や、教師だけの慰労会にしたり、教師の不満をとりあげる活動をした。このような活動は大抵皆の支持を得て成功した。校長の方も大抵のことはゴタゴタするよりもという気持ちで認めてくれた。「赤いチョーク」にはこのような各班の活動ものせた。

新教中央からの学校調査は、はっきりしていないが、これに類したものは研究所に送った。私たちが活動する場合、地域の状況を頭におき、自分の学級の階級分析をすることはまず一番にしなければならないことだ。丁度大王校では公開研究授業の計画があり、学校でも、学校の沿革から職員、児童それから地域の住民の状況などについて調査してまとめていた。それを利用して僕なりに批判的に階級的分析を加えて資料をつくった。そして大王小の名称の個所を削って所宛に送った。

これは大部のものだった。

公開研究授業の対策も組織的にした。たしか「軍神広瀬中佐」という教材（国語じゃなかったか）だった。その教材批判の観点としては階級的なものの方の見方と戦争の問題をとりあげたと思う。戦争の問題は当時の党もそうだったと思うが迫りくる世界大戦に備えよ、帝国主義侵略戦争に備えよというスローガンが叫ばれていたし、とくに満州事変も起っていたので、この問題に私たちは真剣にとりくんだ。それでまず理論的に研究しようというのでクラウゼヴィッツの戦争論の古典から、レーニンの戦争論などを勉強した。

### 5 教労南九州支部の結成

僕らが活動していて一番問題になってくるのは、組織の拡大・強化だった。これが頭打ちになってしまった。乱暴な話ですが、私たちは組織論のようなものを理論的には何も学んでいなかった。教育労働者としての当面の問題とか、それをどう実践しどう組織していくのかということになるともう皆無知に等しかった。それで思いあぐんで新教中央に訴えた。そしたら個人宛に2～3回レポの交換、指導があり、その中で、イデオロギーの先鋭化という点ではあなた方の支局の活動に敬服する。しかし組織という点ではあまりに幼稚だ、組織が先行しその中でイデオロギーの先鋭化が実践的に行なわれるものだ。それがあなた方のところでは反対だ、とやってきた。これによって私たちは目を開かれたような気がした。そしてこのレポを中心にして会議を開いて、このまま我々がもし検挙されたら後には何も残らない。そういうものは組織運動ではない。我々は前衛意識を曲解していた面がある。独善的な面がある。お互同志の間で赤い気焔をあげて、職場の中で孤立した教員生活をしていないか、それを打ち破って組織を大衆化する方向を目指さなければならない、といった議論がたたかわされた。

しかしこの転換は理論的武装が必要だったし、よりどころがほしかった。それが私たちに教労の指導を求めさせた。教労との連絡は新教を通じてあったと思う。それは昭和6年の暮か昭和7年1月頃だ。（教労結成は11月頃という感じもする①）新教のアドレスは松本良夫、教労の方は内野とか云ったと思う。教労の機関紙が1～2部送られてきた。それから僕らに対する指導文書も何回かきた。教労支部は、中央から紹介された鹿児島島の同志と私と佐藤の三名で南九州支部として結成した。

このような状況で昭和7年に入ってから私たちの組織を大衆的に発展させるため、文芸研究会を計画したのだった。（最初の談話では昭和6年7～8月頃つくったという記憶であった。）そしてこれはマークされていない人がやった方がよいというので宮崎百太郎が中心になった。そして宮崎、山元、佐藤の三人で東大出身で都城中学の教師をしていた宇都研さんを訪ね、文芸講演会の計画をたのんだ。そして宇都さんから同じく中学教師（東大出）の西田季春（西田泰彦という名だったかも知れない）に話をもっていった。この会の目的は私たちと大衆との接触の場をつくり、メンバー獲得のプールにするつもりだった。講演会のあと文芸研究会を結成し、それをいくつかの小さな班にわけて何回か研究会、読書会などをやった。その班には私たちのメンバーがはいって活動するつ

もりであった。この研究会には教員の他、郵便局の事務員や元教員などいろいろの人が参加した。こうしてようやく大衆的な活動に転換しようとしはじめた直後弾圧されてしまった。

## 6 弾圧前後

弾圧のきざしは昭和6年11月頃からあった。一つは郵便局員の中馬さんが教えてくれたのだが、私（山元）宛の郵便物が破られて郵便局内で問題になっているというのである。封筒だけ残っていてなかみはなかった。それは共産党の公判記録を特集した「プロレタリア科学」三部が私のところに送られたが、それが取られたのだった。私はその日でしたか翌日でしたか緊急に会議を開いて弾圧対策を議論した。

12月頃、「殿様と三太郎」の件で校長から注意され、いよいよニラマレているなど感じた。それから父の家から少しはなれたところに私は家をもっていてそこで会議をしていたとき、物音がするので床下からくぐって出ようとしたら、ぱっと人影が逃げていくのを見た。それで愈々危険が迫っていることを感じた。もう一つ、当時、津曲から何か異変がおこったら「チチキトク」の電報をうってもらうことにしていた。日ははっきりしないが、検挙される直前頃、津曲から、この電報ももらった。（最初の談話では郵便局のことがあったあと）後に聞いたところでは、東京でメモをもった男が検挙された、そのメモに君のアドレスが書いてあったので君のところもやられると思って連絡したということだった。

このような事があったので、私たちは会議の度に、弾圧対策を討議し、シンパの人々にもお互いの関係について打合わせし、文芸研究会という文学愛好者の大衆的な集まりの線できいとめることにしていた。機関紙の「赤いチョーク」などは焼き、証拠物を残さないようにした。マルクス主義関係の本などは当時としてはインテリの常識のようなものだ。教師として一応心得ている必要があるということで突張ろうと何回も何回も話し合った。3月20日会議があった。この会議は弾圧対策の会でした。当時集まりがしにくく、何回も流会した。学期末というだけでなく何かの事件で集まりにくかった。20日の会では、今日が最後かも知れないと冗談を云った。会議のあと家に帰ると、僕をみて急に逃げ出した人影があった。いよいよと思っていたら、翌21日に検挙された。

取調べは、最初、帝国主義戦争絶対反対などという文字をいろいろ書かせられた。右手、左手、ゆっくり、早く、といろいろ書かされた。これは捕まった者は皆やらされたようだ。まもなく津曲が捕まって同じ監房に入れられた。そのとき、津曲は、「皆、俺をエラ者になっている」と怒っていた。「そんなことはない、我々の自主的な運動だということで皆話し合っている筈だ」といっても、「自分を東京から来た大物の指導者にしたてている」と憤がいていた。

私が釈放されてから（5月頃①7月頃③）同志たちの消息を知ろうとし私は拷問のため衰弱していたので中山たつ子さんに頼んで連絡をとってもらった。私は病気が治ったら再建運動をするつもりだったが、皆、警戒して相手にしてくれなかった。中馬さんもたつ子の友人でしたが非常に警戒して迷惑がられたということだった。宮崎君は病床に訪ねてきてくれ、校長から退職を強要されたとかでもう「アカ」の烙印を押されて働けないから自分はもう一度学校に入って勉強しなおすと

いていた。そのときも同志の動静を尋ねたら、そんなことはしない方がよい、またひっぱられるよと断わられた。結局、都城では何も出来ず、中央にでて運動に参加しようと決心して翌年2月頃、上京した。(②のときには、私は6月頃釈放されて3ヶ月位家で療養して10月頃上京した、と語った)

#### 7 運動の指導における津曲の役割について

津曲とはそんなにひんばんに会っていない。3~4回くらいでしょうか。僕らは組織的な運動はじめてだったし、最初は彼に前衛にたいするというような信頼感、たよるような気持があったが、何回か会ううちになんとなく人間的な魅力がなく嫌味を感じるようになった。なにか私たちをけしかけるようなところとか、おさえつけてくるような指導者振ったところがあった。彼は本当に東京から重要な責任をもってきているのかと疑ったこともある。そのうち理論的にもあわなくなった。僕らは教育労働者としての立場でこの運動をすすめていこうとしていたが、彼は共青ですか、その立場を固執していたのではないかと思う。僕らは自分たちの運動が文芸サークル的な臭みというイデオロギーの研究会みたいな傾向を強くもってこれを克服しなければならないと感じていた。それが基本的な大衆組織としての教労の運動の方向にむかわせたのだが、同時に大衆組織にはいろいろな発展段階のものがあってよい、うんと大衆的なものから、ガッチリした高度なものまでいろいろあってよい。そんな考え方で文芸研を計画した。ところが津曲はそんなエネルギーがあるならと高度な組織を要求する。いやそういうところにいく一つの段階として大衆的な組織は大切だと僕は主張して結局けんかわかれになったようなことを覚えている。それは6年の暮のことではないかと思う。年が明けてからは会っていないと思う。明けて間もなくですね。父キトクの電報が来るのは。

津曲君には色々な雑誌をみせてもらっているが、レーニン青年や農民闘争は記憶にない。農民闘争は書店で買ったような気がする。また彼が意識的・組織的にそれらを送ってきたようには感ぜられない。赤旗は見たことがない。津曲からは色々なことを教えられたが、運動は基本的には僕らのなかで議論しながら主体的にすすめていったと思っている。

#### 8 学習・実践の悩み

教労に連絡をつける前だが、私たちはできるだけ広い教養をもつべきだというので改造社のマル=エン全集なんかも読んでいた。種子田君などは思想的なものを中心に話し、阿万君は社会的な地理・歴史に関心をもっていた。変っていたのは小山君で剣道四段とかで武道史など勉強していた。横山君は文学青年でした。それで集まりがイデオロギーの研究にかたより、それを抜け出そうと努力した。教育の研究会はよくやっていた。あの教科書をどうすればよいのか、あのまま教えてよいのか、それでは無意味じゃないか、そんな疑問はみんなもっていた。しかし我々がうのみにできないこと、疑問に思っていることをつきつめて教えれば赤い教師ということになってやられてしまう。一体皆どうしているのかというのでお互の実践を出しあったわけである。児童への影響という点でおっかなびっくりで、ここまで話していいか、いやこれだけは話しなければいけないじゃない

かと検討しあつた。そのような例が僕の教材研究の報告だったが、これはみんな切実な問題でそれぞれの実践を出しあつて報告、検討し、「赤いチョーク」にのせたのだった。10月11月頃はとくに重視してそういう活動をしたように思う。

山元氏の証言はまだまだ多方面にわたり詳しく行なわれたが、そのすべてを記録する紙幅がないので残念ながらあとは割愛する。なお証言中で佐藤国夫という同志は、昭和5年宮崎師範本科2部卒で大王小学校に勤務するが、翌6年5月の名簿では河野と改姓している所以この運動の時点では河野でなければならないが、山元氏はこの改姓を覚えていなかったのもので佐藤で通してある。また鈴木ミツという女教師も現姓は日高であるが、旧姓のままにしてある。なお鈴木さんは昭和5年、6年は都城小、7年以降は都城南小で、大王校にいたのはそれ以前（昭和2年にいたことは確か）であるから、山元氏の記憶は正しくない。また鈴木さんについての談話内容を日高さんに尋ねたところ否定する点が多いので、この点は今後さらに検討を要する。鈴木ミツという名前自体が記憶ちがいと山元氏の談話の人物は鈴木（現、日高）さんではないのかも知れない。年月については記憶ちがいと思われる点があるが、談話内容の骨子は大方他の資料（B、D）により裏付けることができた。

## D 其の他

山元都星雄氏の書簡や談話の内容を確かめる資料および当時の都城地方の教育状況を示す資料を次にあげておく。（Bで記載した分は除く）

### D-1 三州日日新聞の記事その他（見出しのみ）

6.2.22. 嘆きの塑像（二） 都哲太郎（4.24）（十九まで確認）

4.3 失職者防止のため教員の俸給引下説

4.8 教員待遇は既定方針通り減給せぬやう配慮を乞

4.17 小学校教員 俸給不払ひの対策

5.5 物々しい警戒裡に 社民党の演説会

5.10 児童の成績向上に健康と家庭 大王校の劣等児調査

5.21 小学校教員の減俸には絶対反対 国民教育破壊の虞れあり

5.29 左傾教員組合を組織し 農民の赤化を企つ 二十六名を検挙す 沖縄県学務当局 極度に狼狽

5.31 一般官吏と同率に小学校教員も減俸 文部省令改正に着手

6.3 極左運動の取締に留意せよ 全国特高課長会議

6.21 小学校教員 年功加俸減額 勅令案閣議で決定

6.21 研究発表や諮問等でも緊張した市教育会

10.9 学校の昼食時に弁当の食へない

12.13 都城市教員給は平均六十一円 女教員 四十円九十二銭

- 7.2.17 全学科全経営の公開教授開催 市内大王校の快挙
- 2.18 都・宮小学校教員の意見交歓会
- 3.31 教頭の専横から宮師範の軋轢
- 3.31 忌しい裏面運動で入学が出来ぬ 教育の情実的内申で教育界の問題となる
- 4.5 風紀紊乱の極に達した市外某校の醜状 神聖なる校内が酒池肉林の巷化
- D-2 宮崎新聞**
- 7.6.5 三百余名が列席し けふ県教育会総会 思想問題に対する態度も協議
- 6.5 農村教員の生活苦深刻 教育費の流用は勿論 俸給不払町村が激増
- 6.7 小学教員に関し政治的教材の取扱ひに腐心
- 6.11 農村子弟の休校続出し、思想は益々悪化
- 6.13 給食を必要とする「餓死線」上の児童 給食児童数は実に15万人文部当局も驚ろく
- 6.16 欠食児童の現況を調査 本県が社会局の命で
- 6.20 栄養調査で欠食児童多数判明 都城市学務課でびっくり 二百名の児童が生活の窮乏により欠食または減食
- 6.25 市学務課で欠食児童調査 貧困児童は五百名に達す(宮崎市)
- D-3 宮崎県教育会沿革史より**
- 第67回総集会(6.5.30-31) 409ページ
- 講演 思想犯罪ニ就テ 宮崎地方裁判所検事正 増田疇彦氏
- 支会長会(7.4.15) 416ページ
- 協議事項(六項のうちの一) 思想問題ニ対シテノ対策
- 第68回総集会(7.6.5) 418-419ページ
- 談話題 思想問題ニ対シ吾人ノ採ルベキ態度如何
- 意見発表 思想問題ニ直面シテ 南那支 矢野又吉
- D-4 大分新聞と思われるものに昭和4年7月頃7回連載されたもの**
- 死刑囚の手記 山元都星雄
- D-5 「宮崎県教育」に文芸講演会の速記(山元署名)掲載 昭和5年4月**
- D-6 宮崎新聞と思われるものに昭和5年暮頃、「文壇の展望」(山元の談話では宮崎時事新聞の篠原秀一記者が昭和5年暮富松良夫——都城在住で同人雑誌など出していた文学者——や私など3~4人の話をまとめて書いたものだと云っているものにあたる)**

以上の資料のうち D-1 の 6.2.22~4.24 の「嘆きの塑像」(創作)は、山元氏の思想の転換点を示すものとして重要である。この小説は、佐田という中学校教師を主人公とし、彼が時代の激動のなかで階級的自覚を深め革命運動に参加していく過程を描いたものである。それはまた、当時共産党についてその活動を客観的に紹介することが厳しい制約のもとにあったとき、この小説が共産党の創立から現在までの概史をかなり正しく紹介し、その基本的な性格を述べていたことも注目され

る。それは当時としては大胆な共産主義運動の讚美の文であった。さらにそこには、主人公の佐田とその友人の学校教師Tとの対話の形で「あくまでインテリゲンチヤの役割を信じ」「学校の教師といふ地位を利用して、幼少の生徒にこの社会の矛盾を教へるのだ、この社会の罪惡を暴露するのだ。そして彼等に次に来るべき真実の王国を指示するのだ」「社会の上部構造であるすべての文化、それに対する仕事は、インテリゲンチヤの役目だ」と述べ、階級戦における、インテリゲンチヤ、とくに学校教師の特殊な任務について述べられている。少なくとも山元には、教育の場における教師の階級的文化的役割についての認識が深められつつあったし、闘いの方向、あり方への自覚的模索があったことをこれは示している。

## II 調査結果の要約

1 運動の基本的性格 この運動は基本的には階級的に目覚めた小学校教員を主体とする「新教・教労」の運動であった。この運動は、宮崎県の都城市と北諸県郡の階級的立場にたつ教育労働者が新興教育研究所と連絡をとりその宮崎支局を設置したことからはじまった。彼等は支局のメンバーを拡大しながら自主的な運動体としての組織「日向新興教育研究会」を結成し、当時の情勢のもとで教育労働者に課せられている課題を科学的に究明しながら天皇制軍国主義の教育反動と戦争政策に実践的に対決した。その活動のなかで階級的教育労働者の基本的大衆組織の必要を痛感し、全協・一般使用人組合教育労働部の指導を求めて、その南九州支部を結成するに至ったのである。

この運動は、その影響力をひろめ自らの組織を拡大・強化するため、より広汎な大衆と結びつく場として「都城文芸研究会」をつくった。この研究会が上記の「新教・教労」運動のなかから生みだされたことは明白であるが、文芸研究会自体は格別に階級的立場にたっていたわけではなく、この運動の一翼であったとはいえない。またこの運動のなかで「プロレタリア科学」支局、「ナップ」支局も設置されているが、これは機関誌購読のための「支局」であってそれぞれの運動体としての地方支局としての性格はうすいようである。

2 組織の実態と組織図 この運動はおおよそ次のような組織で活動したと思われる。そのメンバーや氏名など不明な部分が多いが現在判明しているところは次のようである。

〔指導組織〕	〔組織の名称〕	〔組織人数と氏名〕
全協・一般・教労部→	教労南九州支部	3名 山元都星雄・河野国夫・(氏名不詳—鹿児島県の小学教員)
新興教育研究所→	新教官崎支局	10名以上 山元・河野・横山巖・小山光・阿万超二・種子田福盛・谷口忠夫・宮崎百太郎・永井登美・中山某・他
	支局責任者 (山元)	数名
	支局委員会	

日向新興教育研究会 学校班 (所在地) 大王校班 (都城市大王町) 梅北校班 (北諸県郡中郷村) 安久校班 (北諸県郡中郷村) 夏尾校班 (北諸県郡西嶽村) 祝吉校班 (北諸県郡沖水村) 都城高女班 (都城市)	学校班は6班で人数は影響下教員を含めると20名前後と思われる。 山元・河野・他数名 (女教員1名を含む) 横山・他 (?) 阿万・種子田・他 (?) 谷口・他 (?) 小山・永井・仮屋健児 (?) 他数名 (女教員1名を含む) 宮崎, 他 (?)
教労南九州支部 新教宮崎支局	都城文芸研究会 発起人 平井保彦 (都城中) 宮崎百太郎 (都高女) 肥田木淳 (都城南小)
地域・学校別の班組織会員数10数名—40名位この中には支局メンバーも参加している。また現職教員以外に郵便局員2名 (中馬某, 他) 中等学校卒業業者4名 (中山あや, 中山たつ子, 他) 元教員2名が参加している。	記号説明 → 指導関係    = 組織的に密接に連絡    ..... 間接的指導関係

なお上記のうち、新教宮崎支局メンバー中の中山某は当時の学務関係職員録で調査すると西嶽尋常高等小学校 (北諸県郡西嶽村) の訓導中山常二以外に該当者がいないが、C-4では代用教員ということであり、はっきりしない。また日向新興教育研究会の夏尾校班はC-4の谷口訓導の名前がC-6で明らかになり、それによると夏尾校在籍なので、夏尾校班と記したが、C-4では西嶽小と証言されているし、B-11でも西嶽小の名前は出てくるが夏尾校の名前は出てこないの、これも未確定のものである。夏尾小も西嶽小もいずれも西嶽村にあるのでその辺に混同の原因があるのかあるいはそれぞれに別個に組織メンバーがいたのかとも推測される。

**3 運動の指導関係** 資料のA, Bでは、津曲がこの運動を指導したように記しているが、これは津曲が当初共産党員であると推定されていたことから、この運動を共産党指導の運動として性格づけ、治安維持法違反にデッチあげようとした当局の策謀を示すものであろう。たしかにこの運動の発足にあたって津曲は重要な役目を果たし、その後においてもこの当初の関係からこの運動に関与するところはあったが、やはり指導の中心は山元であり、組織的には「新教」「教労」の中央であった。津曲は実際には共産青年同盟員であったと思われるが、この運動とのかかわりが共産青年同盟の組織的指導のもとで行なわれたとは思えぬ点が多い。津曲自身には共青同盟細胞への発展というねらいがあったかも知れないが、もしそうであるとすれば当然山元らの運動を共青組織と連絡するように何らかの手筈をとっておくべきものだからである。しかし次の「その他」の項でのべた事柄にはこの推定に対する反証となりうるものもあり、この点は確定できない。

運動の指導の問題とのかかわりでみのがすことのできないのは、この運動の主体的条件の客観的な成熟という問題である。たとえば山元の思想発展にみられるように、この運動が組織された昭和6年夏頃には、山元は自ら運動をつくりだしていく意志と力量をつけていたのであって、その意味で運動の生成・発展は歴史的必然であったと云えるのである。

4 弾圧 この運動が当時の悪法によっても違法性を問われるものではなかつたことはその不当な取調べにもかかわらず起訴にもちこめなかつたことから明白である。弾圧者側にとっては基本的なねらいは「赤」の恐怖をまきちらし進歩的教員を追放し教員を戦慄させ思想統制を徹底することにあつたといつてよいだろう。この特高の違法不当な弾圧を機として教育行政当局はこの運動に参加したことを口実としてかねてからねらっていた教員の追放を行ない、思想統制の施策を一層強化したのである。

その犠牲者はA-2によれば8名であるが、昭和7年4月段階では山元が懲戒免職、河野、横山、小山、永井登美が諭旨退職、その後翌年5月までの間に阿万、種子田、谷口、宮崎、仮屋健児が諭旨退職になったと推測される。(谷口、宮崎、仮屋についてはまだ不明な点もあり、推定である。)

5 その他 この運動において山元と並んでかなり重要な役割を果たしたと思われる河野(旧姓佐藤——山元の証言では佐藤として記録)国夫については、山元の証言以外に全く資料がない。新聞記事にでてくる関係者(假名)にも該当するものがないし、官側資料にも見当たらない。今後の調査が必要である。

津曲からの「チキトク」の電報については、昭和6年11月30日と昭和7年1月27日に共青中央部が弾圧され、全国の同盟地区、アドなど記した文書が押収されたといわれる(「特高月報」昭和7年4月分)ので、その事件が関係があつたのではないかと推測される。

最後にこの調査報告書の作成にあたり、岡野正、小田真一両氏の資料を利用させていただいたこと、山元都星雄氏が再三にわたり快よく聴取りに応じてくださったこと、都城市立図書館、宮崎県立図書館、宮崎県教育委員会に資料蒐集でお世話になったことを記し感謝の意を表するものである。

(1975. 11. 15)